

はしがき

著者	高橋 昭雄
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	研究双書
シリーズ番号	423
雑誌名	ビルマ・デルタの米作村 : 「社会主義」体制下の 農村経済
ページ	iii-v
発行年	1992
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00013362

はしがき

本書は、筆者が1986年4月から88年4月までの2年間、アジア経済研究所海外派遣員として、ビルマ（ミャンマー）に駐在した際実施した、ヤンゴン（ラングーン）近郊のZ村の農村経済に関する調査の記録をまとめたものである。

筆者がビルマを発って4カ月後の1988年8月、ビルマの町々はネーウィン政権打倒、民主化実現を叫ぶ民衆で埋めつくされた。人々は困窮からの脱出、人権抑圧からの解放、腐敗した独裁権力の打倒、民主主義政権の樹立等さまざまな憤懣と希望を胸に、連日街頭へ繰り出した。民主化闘争は軍事クーデターによって弾圧されたが、ネーウィンに率いられたビルマ式社会主義体制は幕を閉じた。このような大衆のエネルギーの爆発の原因については、ネーウィンの長期軍事独裁、反政府的言動の弾圧、マクロ政策の失敗による経済の破綻など、多様な説明が可能であろう。筆者は、ネーウィン体制末期の農村事情を知る者のひとりとして、ビルマ経済の根幹を支えてきた農民農業の側から、ビルマ式社会主義経済体制終焉の背景を考えてみたい。

「社会主義」の放棄は、1988年9月に発足した軍事政権によって宣言されたが、ビルマ式社会主義経済体制の終わりの始まりといえる農産物の取引自由化は、その1年前の1987年9月にネーウィン政権によって発令されている。本書では、この発令の背後にある農村経済の動揺を、下ビルマの一農村を事例として描くことを試みた。とはいうものの、あくまでも筆者の調査時期はネーウィン体制末期の一時期であり、調査村はたった1村にすぎない。したがって、ビルマ式社会主義体制全般を論じるには無理があるのは当然である。

しかし、1村の事例分析が、今まで知られていなかった新事実や体制の再評価に結びつくような発見をもたらすことがあるかもしれない。こうした考え方に立って、村の事例から飛躍し、敢えて体制論にも若干踏み込んでみた。そのような一般化には、Z村での観察だけではなく、さまざまなマクロデータの分析や筆者があちこちの農村を廻って得た知見も援用した。ビルマ式社会主義経済体制の内実を把握することなしにはその失敗の要因を明らかにすることはできない、という筆者の立場から書かれた本書が、今後のビルマ農業研究にどれだけ役立ち得るか、それは読者の判断に委ねるしかない。

筆者はヤンゴンの自宅から乗合バスに乗ってZ村に通っていたが、毎日非常に込み合って時間もかかり、熱暑の時期であったということもあって、疲労が重なって一時高熱で寝込んでしまうという事態に陥ってしまった。調査を続けるために、当時フレッグー郡内の中央農業開発訓練センターで農業の指導にあたられていた国際協力事業団(JICA)専門家の方々の車に便乗させて頂いた。車の便をはかって下さったうえに、ビルマの農業についてさまざまなご教示を賜った中村成二、成田良一、松本栄市、田中英統の4氏に厚く御礼申し上げたい。また、大鷹弘前大使をはじめとする日本大使館の方々、ヤンゴン外国語学院およびヤンゴン経済大学の諸先生方には、公私に亘って指導と助力を賜った。

そしてZ村では、本書にもたびたび登場する村落人民評議会議長ウー・サンウィン、元農地委員会委員長ウー・ピュー、彼の義理の息子のコー・ミヤッチョーたちには、村の発展史や種々の慣行等について何度もインタビューに応じてもらい、村でのビルマ語の使い方についてもいろいろと教わった。さらに、筆者をZ村へ誘ってくれたビルマ人の親友N氏にも深く感謝しなければならぬ。彼なしには筆者の農村調査は実現しなかったであろう。

筆者に研究者への道を示唆して下さったのは恩師瀬地山敏先生である。アジア経済研究所入所後は滝川勉先生、そして梅原弘光先生を主査として連続と続いてきた東南アジアの農業・農村問題に関する研究会で勉強させて頂いた。桐生稔、斎藤照子、西沢信善各先生には、ビルマ研究についてイロハか

ら教わった。また、小島麗逸先生には入所当初から筆者のつたない論文を添削して頂いた。本書の問題意識，構想，調査方法等は，このような中から生まれてきた。アジア経済研究所の諸先輩や筆者の属した研究会委員の方々の長年にわたるご教示と叱咤激励がなければ，本書を完成させることは到底でしなかつたであろう。ご指導ご鞭撻を賜った皆様の学恩に深謝申し上げたい。

1992年夏

著 者